

特別講演

主催 埼玉医科大学, 後援 埼玉医科大学 卒後教育委員会

平成19年7月5日 於 埼玉医科大学 第三講堂

大学病院医療におけるICDの重要性

首藤 健治

(厚生労働省 大臣官房統計情報部 疾病障害死因分類調査 室長)

ICD (疾病傷害及び死因統計分類提要 International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems) が人口動態統計の国際分類として制定されて以来, 100年以上経過した。その後, WHO が引き継ぎ, 医学の進歩や社会の変化に伴いほぼ10年ごとに修正が行われてきている。現在, 本邦で用いられている分類は, 平成2(1990)年にWHO総会で採択された第10回修正 (ICD-10) が運用されている。ICDは第1章から第22章まで分類構成されている。

ICDとは, 異なる国や地域から, 異なる時点で集計された死亡や疾病のデータの記録, 分析, 比較を行うために国際的に統一した基準で設けられた分類であり, 世界保健機関国際分類ファミリー (WHO-FIC, World Health Organization Family of International Classifications) の中心分類に位置する。

医療政策におけるICDの役割とは, 1) 分類の統計上の活用として統計法に基づき政令として認められている, 2) 疾病の定義として国際的合意がされている, 3) 疾病を分類する, 4) 保健政策上の活用 (例えばDPCに利用できる), 5) 国際的標準化の先にあるものとして比較の可能性を高めるもの等を担っている。

大学病院医療におけるICDの必要性とは行政サイド

からの医療政策上の期待と大学病院側の意識つまり医療の自己評価である。現在, 新たな視点から, 消費者 (臨床医, 行政組織, 患者など) ニーズへの対応, 新たな科学知識の更新 (新しい疾病概念, 治療法, 用語等), WHO-FICメンバー (ICF, ICHI, ICECI, ICD-O等) との互換性, ネットワークや普及システムの改良, 医療情報システムにおけるより有用性の改善などを念頭にICD-11改訂作業が進行中である。ICD改訂のキーメッセージは, 保健科学における概念の複雑化と相互化であり, ゲノム情報までを包含した比較可能な一貫したデータをまとめ上げることであり, これには大規模化した多種多様なステークホルダーが参加している。この改定に伴うプライマリー・ケア, 臨床, 研究におけるICDの多面的活用と今後のさらなる普及に向けて大学病院における疾病分類教育の必要性は増し, 国内での統計整備のみならず, 世界における多角的目的へ貢献することが要請される。ICDは単なる分類やターミノロジーではなく, 各国の医療情報を作り上げる基本要素であり, 戦略的リソースである。

2008年にはICD-11アルファ版が上梓され, 2015年にICD-11が本格導入される予定である。

(文責 金浩澤)